第一回　野外観察をふり返って

５月14日（日）は、今にも泣き出しそうな空模様で夜が明けた。この日を設定し主催する側は、気をもむことしきりである。やがて、K氏より電話がかかる。「今日はどうする？」・・・・数日来、気象情報の雲写真に注意し、天気図や見上げた空の雲高度や厚さ具合から、多分午前中はもつだろうと思っていたので（・・・・・後だからいえること・・・・）「やろう！」と決断し、少し早い目に集合場所の佐川町地質館へと向かう。前日に地質館と鉱山事務所には連絡を入れてあったので、駐車場の確保やその他諸事うまく進行する。定刻の９：３０には予期していたよりははるかに多い38名の会員やその家族などが、雨を予想しての服装で集まった。参加者に名簿の記入をお願いして、竹島洋文氏（追手前高教員）に、簡単な日程の説明をしてもらってから、各自の車に分乗して今日の見学・採集地の「鳥ノ巣」へと向かう。「鳥ノ巣」という字名は、どのような由来があるかは私は寡聞にして知らないが、佐川町から一つ山を東へ越えた土佐市蓮池に「鳥ケ巣」という小字がある。いずれにせよ「鳥ノ巣」は地質学上大変に名高い所ではある。

筆者が中学生の頃、地質学に興味をおぼえ望月勝海著の「地質学入門」（昭和6年　古今書院刊）を恩師の上村　登先生よりお借りして読んでいた頃である。それには佐川盆地を南北に切る地質断面や、末光（スエミツ）クリッペン（末光とはＪＲ加茂駅の南西約１kmの地名）とよばれる古期の岩塊が新期の地層の上にのっかっていることなどが書かれていた。また、当時の少国民理科の研究叢書（昭和18年　研究社刊　全32冊）のひとつに、安田健之介著「化石の研究」がある。これには、佐川の鳥の巣層として10ページ余のスペースを割いて佐川～高知の地質が紹介されているではないか。戦中から戦後にかけての数年間、私の知識欲を満たしてくれる僅かな本の中にこれがあった。しかも歩いていける距離の中にである。これらのノートを持って、猿丸坂を北から南へ通り抜けたのは1947年頃であった。当時の私の住所から山越えで片道15kmの距離であった。

私にとって、「鳥の巣」とはこのような思い出のある土地である。猿丸坂付近は50年前とあまり変わっ

ていないが、「鳥の巣石灰岩」を観察するのに好都合な断面が、現在採石場の東端にでている。下美都岐の鉱山事務所には、吉村さんが待っていてくれて、早速現地に案内してくれた。採石現場は、現在採石を終了して１４０ｍレベルで埋め戻しの作業をしている段階とのことである。ここで、参加者はお互いの親睦をはかるために自己紹介をし記念撮影をする。雲行きがだんだんあやしくなってきたので、鳥の巣石灰岩についての説明は、室内研修の機会にゆずって簡単にすませる。石灰岩中の化石については、高知化石研究会のメンバーの参加もあって、情報の交換に役立った。現在までの知識として、模式地での”鳥の巣石灰岩”の年代は上部ジュラ紀カロビアン～キンメリジアン世とされ、周辺の砕屑岩類からは、白亜紀初期の放散虫化石が報告されている。採石場露頭においても、このような観点からみれば、石灰岩と周りの泥岩との接触部は、シャープに切れていて、石灰岩の形成の仕方からみると、何か不調和な形がみてとれるのである。石灰岩体と砕屑岩類のそれぞれより、堆積方向のオリエンテーションの差異を見いだせないだろうか。今後の研究テーマの一つになりそうに思うがどうだろう。この採石場はエノガタキの地名で、サンゴ，ストロマトポロイド，二枚貝などの産地として名高い所で、今回もこれらの化石が得られた。

昼頃にはついに雨となり、それぞれ車の中に逃げ込んで昼食をとり、午後は町立地質館を見学した。ほとんどの方は、もう何回か入館していてどこに何が展示されているかはよく承知されているとことと思うが、違った人と来て、別な見方をするのもまた楽しい。例えば、小学生と一緒だったり、熟年の方であったりすると、同じ展示物の前に立っても、それらの方々のもらす感想は、地学を学ぶものにとって大きな関心事となろう。随所に前館長の甲藤次郎先生の心配りがみられ、地学普及への先生のなみなみならぬ心意気が感じられる。

最後に、次回からの見学希望地のアンケートをとり、次の機会のお互いの参加を約して、14時すぎに一応の解散として、雨の中家路についた。

（川沢啓三）